

卒業おめでとう!

田中研新聞

第8号

2014年
4月1日発行

2014年4月1日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室
毎月発行
http://earthnation.is.konan-u.ac.jp
編集長：大畔 裕 (M2)

卒業生の皆さんへ

3月25日、卒業式が挙行されました。私の立場からは、卒業式の日には皆さんとお会いし、何らかのメッセージを卒業する皆さんと交わすことができればと思います。今年も、大部分の学生諸君と別れを惜しむことができたことは大きな喜びでした。

ゼミ生とは、4年次の後半に、卒業研究を通じて深いつきあいをすることになります。秋頃はゼミにおける私の突っ込みに対して精神的に参ったり、病気がちになる人が毎年出てきます。しかし、年が明けると

自分がこれをしなければ卒業できないと自覚し、まさに寝食を忘れて没頭するようになります。皆さんをこのような状況に追い込むのはもちろん私の本意ではありませんが、私が考える卒業の基準に達するまでは、手綱を緩めません。いうまでもなく、これだけの回数添削指導をするために、私も自分の時間と命を削って皆さんの卒業原稿に

対峙します。こうした指導を経た、ほとんどの学生は卒業研究に対して満足感を持って卒業していきます。卒業式の日にはそうした気持ちを見せてくれたら私も本望です。「学生時代、勉強はさほどやらなかったけど、卒業論だけは厳しかったら、死ぬほど懸命にやっただけ」と思ってくれたら、私の教員冥利に尽きるというものです。

卒業した後は大人と大人の関係でおつきあいたいものです。卒業後何年かして、研究室にひよっこりやってくる、「先生、飲み

ますよう！」と言ってくれたら、こんなうれしいことはありません。卒業生は私にとっても宝です。皆さんにとっても、卒業研究の指導を受けた教員は私だけ。良くも悪くも、皆さんのゼミの教員は私です。もっと個人的に親しかった先生や先輩などはあるかもしれませんが、私は皆さんの精神活動・知的な部分で頭の中をかき回しました。そういう特別な関係がある人間がここにいるということをお忘れずに、今後の人生を歩んで行ってください。

(田中雅博)



お勧め本

福澤諭吉著齋藤孝編訳「福翁自伝」、ちくま新書

私は最近少々古い本に凝っている。この本は諭吉が晩年、半生を振り返ってかなり自由な感じで書いた本である。現代語訳になってるので、すらすら読める。訳者の齋藤孝氏も、この本は「学問のすすめ」と一緒に読むことを勧めている。私も以前、学問のすすめはまさに齋藤孝氏の訳で読んだ。学問のすすめも意外に面白いと感じたが、福翁自伝は福澤諭吉の人間性があふれていて、なかなか興味深い。

福澤諭吉と言えば慶應義塾大学の創立者として有名であるが(1万円札といたほうがもっとびんと来るか?)、江戸時代末期に咸臨丸に乗り込んでサンフランシスコに行ったときの話が面白い。ペリーが浦賀に来てから10年後に日本が

ら大挙してアメリカに視察に行ったことは、アメリカ人から驚きを持って迎えられるたそうである。非常に歓迎されたとも言っている。まだ英語を使いこなせる日本人が少なかったこの時代、オランダ語に訳して理解していたというから面白い。アメリカのホテルは、おそらく今のホテルとあまり変わらないと思うが(もちろん違う部分があるだろうが、日本の当時の旅館と今のビジネスホテルのような違いはきつくないに違いない)、刀を差してホテルの中を歩いている姿を想像することは面白い。当時、まともに辞書もなく、コピー機もない時代にどうやって外国語を理解したか、非常に興味深い。

福澤は、咸臨丸に乗る前に、大阪の緒方洪庵の塾に入って医学の勉強をしている。そこでのしごきを削って勉強した様子が面白い。まさに、歴史ドラマの中に出てくる世界である。当時、勉強しようとしたらまず本

を写すことから始めたことが、改めてわかる。本もななく、丁寧に手取り足取り教えてもらえるわけではなく、他の人の目を盗んで勉強するのである。人間の勉強への意欲は、勉強の環境とはほぼ無関係、いや、負の相関があるようにも思える。彼のごく近辺で、腸チフスやコレラなどの病気でなくなる人も多数あったように、ほんの昔前まではこういう世界の中で人間は生きていたのだということが改めてわかる。

福澤は大の酒好きだったようだ。博打や女郎屋には近寄らない。いつも、冷静沈着ながら、いろいろなことに興味を持って、大きく生きていた様子が、この自伝から伝わってくる。

(田中雅博)

ハワイで国際学会 郭と田中教授が参加

3月1日から3日の期間、信号処理学会主催の国際学会、NCSIP、14がハワイのホノルルにて行われた。この学会に田中研究室から郭と田中教授が、そして和研研究室から瀧村君、

島山君、和田准教授が参加し、和田先生以外の4名が登壇発表を行った。

この学会の参加者のほとんどは日本の大学に在籍する人ではあったが、国際学



会というところでスライドは実際の発表は、練習していた時の時間より少し早く話してしまったことを除いて概ねうまくいった。英語で行われた質疑応答も少々思案したもの、思った通りに返せたとされる。多くのことが初めてで戸惑った場面も多くあったが、すべてのことが新鮮でもあり、今後のためにも今回の学会は良い経験となった。

今回の学会準備をする中でハワイの正装はアロハシャツであるということなんだ。登壇発表もアロハシャツで行い、ハワイの土地独特の風習にも触れることができた。

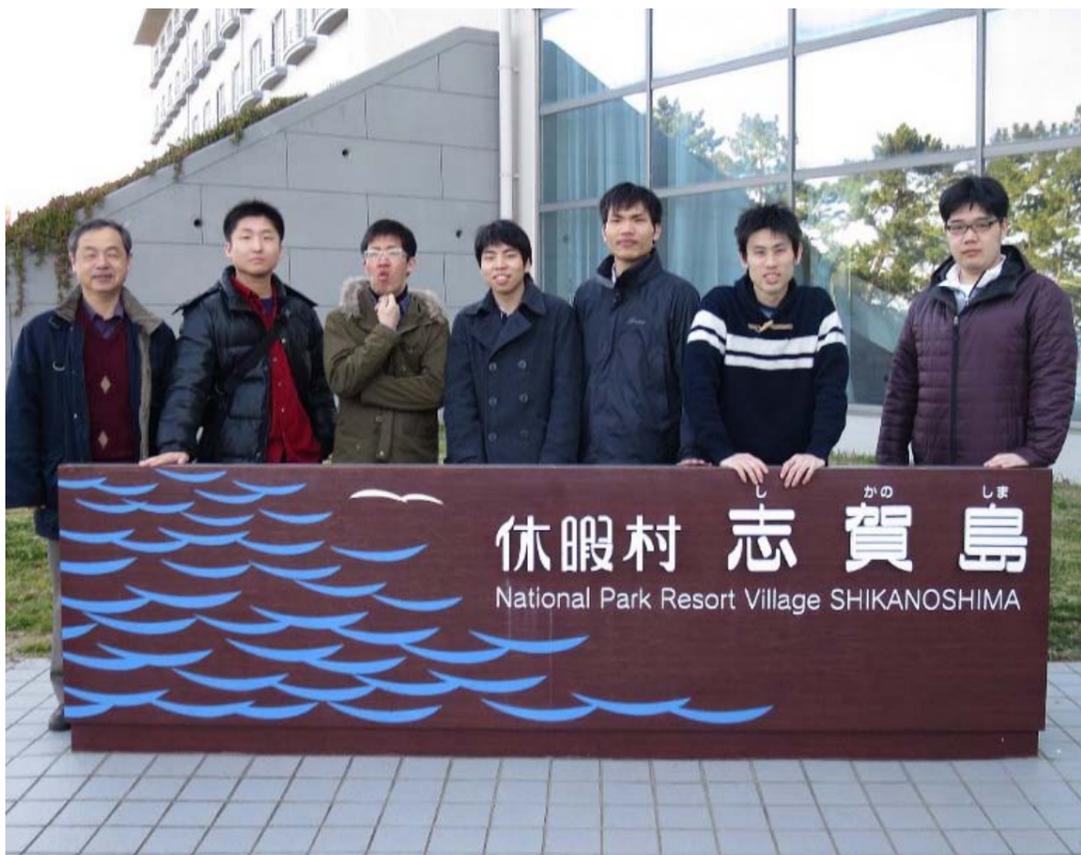
(郭哲史)



ゼミ旅行に行きました

今年には福岡で1泊

今年のゼミ旅行は福岡県でした。福岡といえは新幹線で行くだけだったり、あまり行くところがないのでは？と思いがちですが、実は見どころはたくさんあります。今回訪れた場所を挙げると、①福岡ソフトバンクホークスの本拠地であるヤフオクドーム②日本でも有数の高さを誇り、愛健を付けて恋愛成就の祈願することになった福岡タワー③ロボットを見たり触れたりでき、子供も大人も楽しめるロボスクエア④桜の名所であり、学問の神様が祀られていることでも有名で、さらに受験シーズンだったこともあり、合格祈願に来ていた人がたくさんいました。頭を撫でると頭



が良くなると言われる牛がいたり、いかにも学問の神社っぽいすね。また、大宰府は桜や梅も有名です。私達が行ったときもかなり咲いていて、流石名所と言われるだけあって、とても綺麗でした。

大宰府の敷地内に大宰府遊園地(旧・だざいふえん)があります。敷地は小さいですが、子供もちらほら遊んでいました。また、同敷地内に九州国立博物館があり、古来の道具や生活を見ることが出来ます。敷地はかなり広く、じっくり見ているととも1日ではまわりきれないほどでした。私達が行った日にはやっていなかったのですが、期間限定で特別展示をしているようです。度々足を運んでみ

私は1999年、甲南大学に教授として赴任した。甲南大学では講座制を採用せず、教員ひとりひとりが研究室をそれぞれ持っている。岡山大学のときのような経験から類推するに、研究室のネットワーク管理はぜひぶん大変だろうと不安な思いで赴任した。何よりも、LANの管理が皆さんできるとはすごいと思ったが、来てすぐにそれは買いかぶりであることがわかった。わからないことがあれば、情報センターのSEの方の手助けを得ることが出来るのは大きかった。一般に、コンピュータ関係のことは、わからないことを聞くとあからさまにいやな顔をされたり、暴言を吐かれたりというのが世の通例かと思うが(言い過ぎだろうか?)、甲南大学では、少なくとも、表立ってはそういうことを目にす

ることがないだけでも天国のようである。

私は甲南ではUnix系のワークステーションを持つことは当初から考えなかったが、それは正しい判断だった。当時、パソコンが復活し始めており、私はWindows95とWindowsNT4.0を研究室のコンピュータとして整備した。NTは非常に安定したOSで、設定も楽であり、今でもNTのマシンがあったら欲しいと思うが、残念ながらもう入手できない。特にわかりやすかったのはネットワーク環境の構築で、その後Windows2000やXPでは、一見簡単そうになったが、環境が違うとかえってわからなくなつた。マシンが増えると、Unix環境も欲しい。パソコンから順にLinuxを入れてみたが、利

便性に劣り、画面が半分しか見えなかったり、センサーが使用できなかったり、OSのアップデートの度に再インストールを余儀なくされたりと、残念ながら、安定的に自分のメインのマシンにLinuxを使ったことは未だ一度もない。今では唯一、自分のWebサーバーに使っているのみである。Macは岡山大学時代に趣味的に使っていた時期があり、面白いと思っていたが、甲南に来てからは使う機会がなかなかなく、ようやく最近になってMacBookを持つようになったところである。

90年代終わり頃、あるLinux系の外部講習会で、「Windowsが20年後も存在すると思っているのか」と、講師からWindowsを使いを馬鹿にするかのような言い方をされたのが今でも記憶に残っているが、どうやらその方の予想に反して、まだまだ当分の間健在のようである。

研究でのアプリケーションシステム作りも結局Windowsの上でやっている。

現在、コンピュータの環境としては、OSについてはWindows, Mac, Linuxに加えてAndroid

roidもあり、また、使われるプログラミング言語も、C++, C#, Java, VB, Python, Perlなど非常にたくさんあって、勉強するのは面倒ではあるが、逆に、だからこそ存在しているような仕事もあるわけで、当学部の学生ならこのようなコンピュータ環境にいる我々の時代を不幸だと思わず、それを肯定的に捉えて欲しいと思う。(これで連載終わります。長らくおつきあいいただき、ありがとうございます。次は別の連載を始めたいと思っています。)(田中雅博)

識にも互いの研究が似てくるものだなあと印象を持ちました。渡邊教授は画像認識の研究歴は長く得意とされていますが、こちらは距離センサーの応用歴が長く、それぞれ特徴となっています。夜は森伊蔵や村尾といったプレミアム焼酎を飲むこともでき、薩摩の夜を堪能しました。

次回は来年3月頃甲南大学で行うことになっており、そのときには当方の学生諸君にも発表してもらいたいと思っています。(田中雅博)



鹿児島大学大学院理工学研究科渡邊教授の研究グループと、甲南大学知能情報学部田中教授を中心とする研究グループでロボット・コンピュータビジョン研究会を定期的に開催しておりますが、このほど3月17日に第3回目が鹿児島大

学で行われ、和田准教授、梅谷准教授とともに参加しました。私は3年ぶりの鹿児島なので、桜島など、鹿児島らしい景色を見るのが楽しみでしたが、あいにくの曇天・雨天で、残念ながら天候には恵まれませんでした。しかし、初めて乗る

九州新幹線は快適で、あっという間に鹿児島に到着しました。

渡邊教授の研究グループには佐藤公則教授、鹿嶋雅之助もおられ、鹿児島大学に行った際には毎回一緒に研究会を行っています。

私は、最近の中心的なテーマである、デブセンサによる路面・障害物検知システムという題目で基調講演をさせて頂きました。

梅谷先生、和田先生の講演を含み、一般講演8件、デブセンサによる3件という、充実した内容のプログラムで、鹿児島大学の学生の発表も多数ありました。また、春休み中であるにも関わらず、ほとんどの4回生と院生が自発的に参加しており、研究意欲の高さにも感銘を受けました。

発表、特にデブの内容は移動ロボットの人物追跡、署名認識やAR, Droneの応用研究など、こちらの研究室でのものと類似した研究も多く、合同で研究会をしているうちに、無意識にも互いの研究が似てくるものだなあと印象を持ちました。渡邊教授は画像認識の研究歴は長く得意とされていますが、こちらは距離センサーの応用歴が長く、それぞれ特徴となっています。夜は森伊蔵や村尾といったプレミアム焼酎を飲むこともでき、薩摩の夜を堪能しました。

次回は来年3月頃甲南大学で行うことになっており、そのときには当方の学生諸君にも発表してもらいたいと思っています。(田中雅博)

今月も無事完成しました！最近復活ばかりで自分のネタがなかったため、記事の多くを先生に頼ることになってしまいました。本当にありがとうございます。本当にありがとうございます。次回分のネタも不足気味なので、早いうちにネタ探しをしなければ！

前回の頃はエンタリースhirtsがたくさん積み重なって、悪戦苦闘していましたが、それらが通過し3月に入ってから面接が増えました。初めこそ緊張はありましたが、最近慣れてきて落ち着いて受け答えできるようになった気がします。4月に入ってから面接ラッシュで、企業によっては最終面接も始まるので、気を引き締めて挑み、是非とも志望度の高い企業から内定を貰いたいところです。研究に専念するため、あと二輪の免許取りに行くために、早く進路を決めたいと思っています。

そういうえば、今度面接で静岡行く予定なんですけど、なにか見るものあるんですかね？静岡市内、特に静岡駅から清水のあたりでオススメがあったら誰か教えてください！(大野裕)